

京都からいいこと、いろいろ——

平成24年3月1日発行
月刊「茶の間」(早春号)
毎月1回1日発行

茶の間 3

2012
早春号

京都で出会おうひなまつり

さあ、
春さがしに
出かけよう！



弥生の京で
春を探して

京の老舗 日吉屋

京和傘



着物文化が息づく京都で
唯一和傘作りを続ける老舗。



五代目当主
西堀耕太郎さん

にしぼり こうたろう ● 京都の和傘製造元・日吉屋の5代目当主。「伝統は革新の連続である」を理念に掲げ、伝統的な和傘の継承のみならず、和傘の技術・構造を取り入れた新商品を積極的に展開する。中でも、和傘風照明「古都里-KOTORI-」シリーズは、その優れたデザイン性で08年グッドデザイン賞・中小企業庁長官特別賞など数多くのデザイン賞を獲得。国内外で高い評価を得る。

和傘ごしのやわらかな
光に、ふとひらめいて。



かつては「京の着倒れ」と言われたほど着物文化が盛んだった京都。しかし、洋式の生活スタイルが浸透するにつれ、和服を日常で着る機会が少なくなりました。それは、着物文化に支えられてきた和傘も同じです。それでも、冠婚葬祭、茶道、演芸…と機会が減ったとはいえ、決して絶えることのない文化を支えるため、和傘製造元の老舗・日吉屋は、京都で唯一、今でも伝統的な和傘作りを守り続けています。

「現代に伝えられてきた技術や役割を大切にしながら、新たな日常にあったかたちを提案していきたい。革新の連続が伝統だと考えているんです」

そう話すのは創業百年以上の伝統を受け継ぐ五代目当主・西堀耕太郎さん。「今でこそ和傘を使う場面は減りましたが、もともと和傘は魔除けや身分を示すためのものだったり、頭にかぶって使用していたものが現代のよう

【和傘ができるまで】



①竹や和紙などの素材を加工し、部品を作る。②口クロと呼ばれる部品に竹骨を糸でつなぎ、開閉できる骨組みを作る(写真1)。③傘の大きさに合わせて裁断した和紙を特製ののりで貼付けていく(写真2)。④乾燥させ、綺麗に畳めるように折り畳んでいく。⑤防水のため油を表面に塗り、天日で数日〜二週間程度干し(写真3)、仕上げに糸飾りや傘の開閉を止める金属製のハジキという部品などを取り付ける。

部屋をやわらかな光で包む照明は、和洋どちらのスタイルにもなじむ。

京和傘の伝統の技を 灯りの世界に 和傘風照明



に折りたためるものになったりと、時代によって役割や技術が進化してきました。だったら、今の時代にあった和傘のかたちとはどのようなものかと考えていたんです」

そんなある日、西堀さんが外で天日干しの作業をしていると、ふと、和傘から日光がやわらかく差ししていることに気がつきました。

「この和傘の特長を日常で使う照明にしてみたらどうかと考えたんです」

和傘風照明『古都里』で、 京都から世界を照らす。

西堀さんのひらめきを形にしたのが、和傘風照明『古都里』シリーズです。美しい幾何学模様を織りなす竹骨と光をやわらかに透過させる和紙。和傘の構造と技術を取り入れて作られた和傘風照明は、国内外で高く評価され、数多くのデザイン賞を受賞しました。

そこには傘のように開閉できる仕組み

など、和傘職人・西堀さんだからこそアイディアが多く使われています。



傘のように折り畳むことができるランプシェード。

「持っていない和傘の技術を生かすことが職人の仕事です。ただ和紙や竹を使うだけなら、他の人にもできますから。和傘の良さを生かしたものにゃないと、『和傘職人』が照明を作る意味がないですよね」

伝統の技術を日常の生活品に取り入れる。職人の確かな技術とアイデアで、和傘は新たな魅力を発揮します。

「新しい素材を試したり、デザイナーと協力したり、いろいろ試行錯誤をしています。一方で、伝統的な和傘の制作や修繕も続けています。和傘は茶道や伝統芸能でも使われていますから、昔ながらの和傘を守ることは、他の伝統を守ることにつながるんです。だからこそ、古きも新しきもどつちも大切なんです」



data

【住所】京都市上京区寺之内通
堀川東入百々町 546
【電話】075-441-6644
【営業時間】10:00-17:00
【定休日】年末年始
【HP】<http://www.wagasa.com/>